

或る日、マガダ国の王^{おうしゃじょう}舎城^{おさ}を治めるピンビサーラ王が、お釈迦さまに会いに出たところ、遠くに歩くほかの信仰を持つ修行者をお釈迦さまと見間違えてしまいました。

その為に、お釈迦さまとその弟子たちと、他の修行者との区別^{いふく}が出来る衣服を着るようにと、ピンビサーラ王はお釈迦さまにお願いしたのです。

それを受けてお釈迦さまは「お袈裟」を作りました。

お釈迦さまが南インド地方の村へ訪れた時、素晴らしく整っている田んぼの形を見て、この田のように長い布と短い布をつなぎ合わせてお袈裟を作るようにと、弟子の^{あなんそんじや}阿難尊者に指示されました。こうして、お袈裟はお釈迦さまとその弟子たちの^{しるし}印として着られるようになったのです。

良い田んぼであればあるほど、そこに蒔かれた種は数倍、数十倍の収穫が有るよう
に、修行者たちも徳が優れていればいるほど、信者の^{ほどこ}施した^{くよう}供養が数倍、数十倍の福を信者に^え得させるとして、修行者は^{ふくでん}福田とも言われ、世の中に^{ふくとく}福德の^{しゅうかく}収穫を与える田んぼとなる事からも、お袈裟の事を「^{ふくでんえ}福田衣」とも呼ぶのです。

「お袈裟」を着けていれば、お釈迦さまの弟子である事は誰の目からも明らかであり、また人の世の^{ふくでん}「福田」たらんとするお袈裟を着ける者の^{うかが}覚悟の程が窺えます。

一般の人は色々な着物を持ち合わせています。対して当時は裸を恥と思わないほど何も持たない修行者もありました。お釈迦さまは、多くの^{ころも}衣を持たず裸ではなく、^{ごじょう}五条・^{しちじょう}七条・^{くじょう}九条の^{ころも}三つの衣、つまり「お袈裟」を用いなさい。その色は三種類の色、すなはち、青・黒・木蘭の三色である、と示されました。その為に「お袈裟」は「^{えじきえ}壊色衣」とも呼ばれます。派手な色ではなく黒ずんだ色を用いることで、衣の形だけではなく、色からもお釈迦さまの弟子である事が見分けられたのです。

更に「お袈裟」に使う布は、不要になって捨てられた布で作るものが最上とされるので、ぼろ布や捨てられた布を指す^{ふんぞう}糞掃^{ふんぞうえ}から「糞掃衣」とも呼びます。

まだまだ「お袈裟」にはその理由からなる呼び名がありますが、いずれも「^{ぶつきょうと}仏教徒のあるべき生き方」から出てきたものです。

そこにはお釈迦さまの大切な教えがあるのです。